

創造される宇宙・誕生する宇宙

村 上 陽一郎

おおよそどの文化圏にあっても、自分たちの住まう世界がどのようにして出現したか、ということの説明する開闢神話が見られる。

自分とその存在する位置とを確認したいという欲求は、知識の中でも最も原初のものであると同時に、最も根源的なものであろう。自分自身から始まって、その欲求の範囲は、空間的にも時間的にも少しずつ拡大していく。ここで空間的、時間的と書いたことには、恣意的以上の意味がある。

「宇宙」という漢語がある。この語の歴史は中国でも極めて古くまで遡れるらしい。「上下四方を宇と言い、往古来今を宙と言う」という説明が、晋代の文献に残されているので、いづれにしても、「宇宙」とは、自分を取り巻く空間的な世界と、自分が存在しなかった過去から、自分の存在しない未来に至るすべての時間的な世界とを指している。ヨーロッパ系の宇宙に相当する語「コスモス」が、「秩序」に由来することに比べれば、この宇宙という中国の概念は、まさしく人間が自分を中心に置きながら、そこから空間的・時間的に知的関心を広げていくという現象に、見事に即応していると言えるだろう。

そこで、宇宙についての開闢神話は、自分たちの住まう世界の規定と、その世界の時間的な「始まり」、そして多くの場合はその未来の成り行き（自分自身の成り行き、特に死後の状況）について、何らかの考え方を語ることになる。すでに経験した世界と出来事を、想像力によって外挿した結果が、そうした神話となって語り継がれてきたと推測される。

ここでは、そうした宇宙開闢の神話のなかから、私たちに比較的なじみの深い日本の『古事記』と、ユダヤ・キリスト教の『創世記』とを比較検討してみたい。『創世記』が少なくとも歴史上一五〇〇年以上に亘って「ヨーロッパ」の宇宙開闢神話と見なされてきたことは、ヨーロッパの地域においてより原初的なケルト文化を考慮に入れたとしても、一応異論のないところであろうが、『古事記』がアジアの宇宙開闢説を代表するものであるか、という点になると、これはとても肯定する勇気は筆者にもない。ただ、両者に代表されるようなそれぞれの特徴は、比較における相違を際立たせるには充分であると同時に、世界において、ユダヤ・キリスト教系の『創世記』型の開闢説が、むしろ希少なものであるということを理解す

るにも役立つと思われる。

『古事記』（本稿で引用されるテキストは、岩波版「日本古典文学大系」の一卷『古事記祝詞』に拠るが、漢字は正漢字は使わない）における開闢の件は次のように読まれる。煩雑を厭わずに原文の「岩波版読み下し」を以下に掲げることとする。

天地の初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神（あめのみなかぬしの神）、次に高御産巢日神（たかびむすびの神）、次に神産巢日神（かみむすびの神）、此の三柱の神は、並独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に国稚く浮きし脂の如くして、久羅下那州多陀用弊流時（くらげなす漂へる時）、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじの神）、次に天之常立神（あめのとこたちの神）此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠したまひき。

上の件の五柱の神は、別天つ神。

次に成れる神の名は、国之常立神（くにのとこたちの神）、次に豊雲野神（とよくものの神）、此の二柱の神も亦、独神と成り坐して、身を隠したまひき。

次に成れる神の名は、宇比地邇神（うひじにの神）、次に妹須比智邇神（いもすひじにの神）、次に角杵神（つのぐひの神）、次に妹活杵神（いもいきぐひの神）、次に意富斗能地神（おほとこのじの神）、次に妹大斗乃弁神（いもおほとこのべの神）、於母陀流神（おもだるの神）、次に妹阿夜訶志古泥神（いもあやかしこのねの神）、次に伊邪那岐神（いざなぎの神）、次に妹伊邪那美神（いもいざなみの神）。

上の件の国之常立神以下、伊邪那美神以前を、併せて神代七代と称ふ。

こうして関わりのある「神」の名をひたすら列挙することは、一つには「名付け」という行為の重要さに由来し、もう一つには、誰も知らないこうした特殊な名前を諳んじていることが、記述の権威性を増すとともに、自分たちの系譜の正統性を主張することにも貢献すると考えられていたからだろう。同じような記述は、ユダヤ・キリスト教の聖典である『創世記』の五章などにも現れることは注目してよい。

さて神代七代の最後に登場する伊邪那岐と伊邪那美との二柱の神によって行われる国生みが、この件の核心となる。

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流国を修め理り固め成せ」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮き橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして晝きたまへば、塩許々袁々呂々邇（しほこをろこをろに）晝き鳴して引き上げたまふ時、其の沼矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁呂島（おのごろしま）なり。

其の島に天降り坐して、八尋殿を見立てたまひき。是に其の妹伊邪那美命に問曰ひたまはく。「汝が身は如何か成れる」ととひたまへば、「吾が身は、成り成りて成り合はざる処一処あり」と答曰へたまひき。爾に伊邪那岐命詔りたまはく。「我が身は、成り成りて成り余れる処一処あり。故、此の吾が身の成り余れる処を以ちて、汝が身の成り合はざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むこと如何」とのりたまへば、伊邪那美命「然善けむ」と答曰へたまひき。

少し長い引用になったが、この引用文の最後の件が、我が国の誕生の直接の源と考えられている。ここで「誕生」という言葉を遣ったのは偶然ではない。まさしく、日本の国土は、伊邪那岐という男神と、伊邪那美という女神との間の性行為によって「誕生」したのである。産み落とされたのである。実は『古事記』では、この経過はそう簡単ではない。言わば野合の末に産み落とされた子供は、全うな国土にはならなかった。そこで、反省した二柱の神は、正式に婚姻の手続きを踏み直し、その結果ようやく大きな島（本州、四國、九州）が誕生することになる。その細かい経緯はここでは省略するが、いずれにしても、日本人が住む世界は、神々の生殖行為に果実なのである。

なお付け加えておけば、『古事記』は、現存の文化の正統性を主張するために、過去の始まりを時間的な遡及をする（神の国、天の国）だけに留まっているわけではない。その圏域つまり支配下の空間的な世界を規定する（中つ国）こと、さらには人間が将来に向かわなければならぬ死の世界として黄泉の国をも規定している。つまり『古事記』は完全に「宇・宙」について語っている神話であるといえることができる。

さらに、これほど「性」が前面に露骨に現れている開闢神話はやや珍しいかもしれないが、しかし、世界を見渡すと、生殖による宇宙の誕生という考え方はむしろ一般的である。例えば中国の『四書五経』のなかに画かれる世界の初めは、「盤古」という神を生み出す「卵」の描写が基本である。あるいは北欧神話（恐らくはケルトも含めて）でも「宇宙卵」と言うべき存在が鍵を握っている。インドの民間説話である「プラーナ」のあるもののなかでも、宇宙の始りは「卵」として画かれる。「卵」というのは生殖の出発点であるから、こうした神話類は、やはり宇宙の初源を間接的にではあれ「生殖」に委ねていることは明らかであろう。

さて、こうした事例と見事な対照をなすのが、ヨーロッパ宇宙観の原型となったユダヤ・キリスト教の宇宙開闢の神話である。それを、『創世記』の記事に見てみよう（テキストは、日本聖書協会の「新共同訳」版に依拠する）。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた、「光あれ」と。

こうして、光があった。神は光を見て良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、

闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

こうして始まった神の創造の行為は六日目を迎える。それまでに造られたのは、大空、海、大地、草と果樹、星辰、水中の生き物、鳥、家畜、獣、地を這うもの、などであった。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うもの全てを支配させよう」。

神はご自分にかたどって人を創造された。神のかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這う生き物すべてを支配せよ」。

これが『創世記』の世界創造の件である。ここには顕著な幾つの特徴を明らかにすることができる。第一は言うまでも無く、世界が神の手で造られた（生まれたのではなく）という明確な宣言である。生殖によって「誕生」した宇宙と違って、そのなかには創造者が被造物の世界に求めた秩序が、そのまま実現されている。第二には、その秩序の維持者として、被造物のなかから特別に人間が選ばれて、その秩序安定のために働く統治者の役割を果たさせようとする神の意志が見て取れることである。

第一の点は、宇宙が神の作品であって、その作品には、創造者の意図、あるいは計画が内蔵されているという発想を生む。ヨーロッパの最も大きな知識革命であった十二世紀ルネサンスに出現したスコラ学では、そうした神の意図を<voluntas Dei>と呼ぶ習慣が定着し、また宇宙が、聖書に次いで神の書いた第二の書物であるという解釈も生まれた。聖書を読むのと同じように、自然・宇宙を読むことによって、神が何を計画し、人間を含む宇宙全体をどのように動かそうとしているのか、そのデザインを理解することができる、と考えたのである。

すでに引いた聖書の文言も象徴的である。神は自分の創造する作品を一々確認する作業をしている。そのことは「良しとされた」という句によく現れている。全知全能の神であれば、自分の思い通りに作品が仕上がらないことはあり得ないはずだが、それでも一つ一つ造られたものを見て、自分の思惑の通りに仕上がっているかどうかを確かめている風情が、この文章から伝わってくる。

いずれにしても神の作品のなかに神の意図が含まれており、しかもそれが理解可能な形で示されている、という信念は、「生まれた宇宙」観にあってはあり得ないものと言える。

この点は微妙に第二の特徴に繋がる。神からその作品の「支配・統御」の役割を委任された人間は、そして人間のみが、神の計画実現の協力者として、その計画を知る義務があり、また権利がある、という考え方を生んだといえる。そのためにこそ、神は「自分にかたどって」人間を造り、さらに自らの息吹を鼻から人間に送り込んだ（『創世記』第二章七節）。人

間以外の被造物に、このような特別扱いを受けた存在はない。

神の意図は人間にとっては理解可能である（全面的にかどうかはともかく）、神はそのように宇宙と人間を造った、これが特にヨーロッパ思想の中心に座り、結局は科学をも生み出した、と考えることは、決して牽強付会にはなるまい。

もう一度『古事記』における「生まれた宇宙」の場合を思い起こしてみよう。当初生まれた「子供」は期待からはかけはなれた「ひるご」でしかなかった。あわてて、婚姻の仕切りなおしをして、その挙句にようやく所期の「子供」が生まれるが、生まれた「子供」と生んだ両親との関係は、それで終わる。「所期の」と書いたが、それは一応当初の期待に副っていたけれども、しかし偶然もまた大きな作用素であったに違いない。また人間は、高天原から中つ国に降った神の後裔であるが、そこには、生んだ両親の意図や、生まれたものの意味が、明確に伝わっているわけではない。むしろ『古事記』の内容それ自体が、辛うじて生まれたものの「意味」を伝えているに過ぎない。そこからは、宇宙を支配する「生んだもの」の意図の存在も感じられないし、宇宙を調べればそれが人間に理解され得るという可能性も読み取れない。「成り行く」ままの世界のなかに人間は生きることになる。

「創造される宇宙」と「誕生する宇宙」との対比は、このように明確な差異を示してくれる一つの鍵なのではあるまいか。